

# 主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	澤田 詩織 (旧姓：鈴木 詩織)
主論文題目： センサ連携ライフログによる服薬アドヒアランスの向上				
<p>(内容の要旨)</p> <p>住み慣れた自宅で療養生活を送る在宅療養は、患者やその家族のみならず、医療機関、医療費を負担する自治体や国からもその拡充が求められている。本研究では在宅療養に移行するための障壁となる課題の中で、患者が医師の処方通りに服薬できていない服薬不良に着目し、<b>Information and Communication Technology(ICT)</b> を利活用することによって患者自身の積極的な服薬意識(服薬アドヒアランス)を養成し、それによる服薬不良の改善を図った。</p> <p>本研究は、仮説 1. 服薬アドヒアランスの向上には、在宅療養関係者等からの励まし等のフィードバックが有効である。仮説 2. 服薬アドヒアランスの向上には服薬の見える化が有効である。の 2 つの研究仮説を検証した。</p> <p>仮説 1. の検証では、センサ連携ライフログシステムを新たに構築し、日本および米国における高齢の在宅療養患者 10 名に対して、このシステムにより得られた服薬情報に基づき、自動的に服薬不良・服薬良好の判定を行うとともに、患者に情報をフィードバックすることによる服薬状況の変化を測定した。その結果、服薬状況データだけを提示する方法では、高齢者の場合服薬状況の改善は一時的で、長期的には持続できないことが明らかになった。一方、在宅療養関係者からのメッセージとして提示する場合には、服薬状況の改善効果が持続することが明らかになった。</p> <p>仮説 2. の検証では、誰に/どこまでの情報粒度で、服薬状況の見える化を実施することが有効であるかについて、上記実験で得られた実際の服薬状況のデータを用いて、訪問時に服薬状況を確認することを模擬したデータセットと、これに服薬時刻を加えたデータセットの 2 つを作成し、それを医師とケアマネジャー 41 名に提示し、それぞれの立場で情報粒度が服薬良好・不良の判断にどのように影響するか比較検討した。その結果、提供する情報粒度が細くなることにより、服薬不良の検知確率は向上するものの、データ解釈の共有化、医療・介護チームの連携も必要であることが明らかになった。</p> <p>以上により、本研究は在宅療養患者の服薬アドヒアランス向上のためには、<b>ICT</b> を利用した継続的な服薬モニタリングと患者に応じたフィードバックをすることが有効であることを、世界で初めて継続的な実証実験により示すことができた。</p> <p>キーワード： 1. 在宅療養. 2. 服薬アドヒアランス. 3. フィードバック. 4. 見える化.</p>				